

雑記帳より（2 [#「2」はローマ数字、1-13-22]）

寺田寅彦

青空文庫

一

今年の春の花の頃に一日用があつて上野の山内へ出かけて行った。用をすました歸りにぶらぶら竹の台を歩きながら全く予期しなかつたお花見をした。花を見ながらふと氣の付いたことは、若いときから上野の花を何度見たかしのない訳であるが、本当に桜の花を見て楽しむ意味での花見をすることが出来るようになったのはほんの近年のことらしい、ということである。それ以前には花を見るつもりで行つても花よりは花を見に来ている人間が氣になつて仕方がなかつた。人にこだわ리ながら花見をして歸ると頭が疲れてがっかりしたものである。家族連れで出かけるとその上に家族にこだわるので疲れ方が一層はげしかった。それなのに、どうしたことか、近頃はそれほど人にこだわらないで花が見られるようになったらしい。これが全くこだわらなくなる頃にはもう花が見られなくなるかもしれない。

二

あらゆる花の中でも花の固有の色が単純で遠くから見てもその一色しか見えない花と、色の複雑な隈取りくまどりがあつて、少し離れて見ると何色ともはつきり分らないで色彩の揺曳ようえいとでも云つたようなものを感じる花とがある。朱色の罌粟けしや赤椿などは前者の例であり、紫色の金魚草やロベリアなどは後者の例である。一体に朱赤色や濃黄色といったような熱色の花には単調な色彩が多くて紫青色がかつたものや紅でも紫がかつたものにはこうした色のかがいとでもいったものがあるらしい。柱作りに適するローヤル・スカーレットという薔薇がある。濃紅色の花を群生させるが、少しはなれた所から見ると臙脂色えんじいろの団塊の周囲に紫色の雰囲気のようなものが揺曳しかげろうているように見える。

人間の色彩といったようなものにもやはりこうした二種類があるように思われる。少なくも芸術的作品はそうであるし、またことによると科学的な仕事にもいくらかさういう區別があるような気がする。物理学の方面だけで見ると一体にドイツ学派の仕事は単色で英国派の仕事には色彩の陽炎かげろうとでもいったものを伴つたものが多いような気がするが、それは唯そんな気がするだけで具体的説明は六むつかしい。

人間の個性の差別が実に些細なことにまで現われるという一つの実例をついこの頃見付けた。ある研究所の廊下に所員の姓名を記した木の札が掛け並べてある。片側は墨で片側は朱で書いてあるのを、出勤したときは黒字の方を出し、帰るときは裏返して朱字の方を出しておくのである。粗末な白木の札であるから新入りでない人の札はみんな手垢で薄黒く汚れている。ところが、人によっては姓名の第一番の文字のところだけに真黒に指の跡を印している人があるかと思うと、また二番目の字を汚している人もある。そうかと思ふとまた下の二字を一樣に汚して上の二字は綺麗に保存しているものもある。一方ではまたちつともそうした汚点をつけていない人もある。こうした区別が何を意味するかはそう簡単な問題ではないであろう。しかし、ことによるとこの姓名札の汚し方の同じ型に属する人には自ずから共通な素質があるかもしれない。そうして、人間の性情の型を判断する場合にこの方がむしろ手相判断などよりも、もつと遙かに科学的な典拠資料になりはしないかと想像される。

少なくとも、真黒な指の痕あとをつけている人は、名札の汚れなどという事には全然無関心な

人であるというくらいのは云われそうである。わざわざ痕をつけて、それが日々黒くなるのを楽しみにする人はめつたになさそうに思われる。

気が付いてみると自分は一番上の字の真中を真黒にしている。同じ仲間が近所に二人はある。この二人と自分とだいたい似たところがあるらしい。自分の場合では、掛けた札がちゃんと後ろの板に密着しないと気持が悪いから掛けたあとでぱちんと札を押しつける、それを押しつけるには釘に近い上の方を押すのが一番機械的に有効だからそうするらしい、勿論無意識にそうするのである。

釘に引っかけられる札の穴の周囲を疵きずだらけにしている人と、そうでない人との区別もあるらしい。これと汚れ方との相関もあるらしいがまだよく調べてみない。

ともかくも恐ろしいことである。「悪いことは出来ない」わけである。

四

ある家の告別式に参列して親類の列に伍して棺の片側に居並んでいた。参拝者の来るのが始めのうちは引切りなしに続いてくるが三十分もたつと一時まばらになりやがてちよっ

と途切れる。またひとしきりどかどかと続いて来るかと思うとまたぱったり途絶えるのである。それが何となく淋しいものである。

しばらく人の途絶えたときに、仏になつた老人の未亡人が椅子に腰かけて看護に疲れたからだを休めていた。その背後に立っていたのは、この未亡人の二人の娘で、とうに他家に嫁いで二人ともに数人の子供の母となつていたのであるが、その二人が何か小声で話しながら前に腰かけている老母の鬢びんの毛のほつれをかわるがわるとりあげて繕つくろつてやっている。つい先刻までは悲しみと疲れとにやつれ果てていた老母の顔が、さも嬉しそうに、今まで見たことのないほど嬉しそうにかがやいて見えるのであった。

なんだか非常に羨ましいような気がして同時に今まで出なかつた涙が急に眼頭を熱くするのを感じた。

五

八十三で亡くなつた母の葬儀も済んで後に母の居間の押入を片付けていたら、古いボールの菓子箱がいくつか積み重ねてあるのに気がついた。何だろうと思つて明けてみると、

箱の奥に少しずつ色々の菓子の欠けらが散らばっていた。それを見たときにはつと何かしら胸を突かれるような気がして、張りつめて来た心が一時にゆるみ、そうして止処とめどのない涙が流れ出るのであった。

六

ある食堂の隣室に自働電話の自働交換台がある。同じような筒形のものが整列し、それが数段に重なっている。食事をしながらぼんやり見ていると、ときどきあちこちに小さな豆電燈がついたり消えたりする。それらの灯のあるものは点つたと思ふとパチ／＼とせわしなく瞬まばたきをしてふつと消える。器械の機構を何も知らないものの眼で見ていると、その豆電燈の明滅が何を意味するのか全く見当がつかない。ただ全く偶然な螢火ほたるびの明滅としか思われないであろう。しかし、この機構の背後には色々の人間がさまさまの用談をし取引を進行させており、あらゆる思惟と感情の流れが電流の複雑な交錯となつてこの交換台に集散しているのである。

現象を記載するだけが科学の仕事だというスローガンがしばしば勘違いに解釈されて、

現象の背後に伏在する機構への探究を阻止しようとするところがあるような気がする。しかし、気をつけないと、自働交換台の豆電燈の瞬きを手帳に記録するだけで満足するようなことになる恐れがないとは云われない。

七

ドンキホーテの映画を見た。彼の誇大妄想狂の原因は彼の蒐集した書物にあるから、これを焼き捨てなければいけないというので大勢の役人達が大きな書物をかかえて搬はこび出す場面がある。この画面が進行していたとき、自分の前の座席にいた男の子が突然大きな声で「アー、大掃除だ」と云った。つい近頃五月の大掃除があつたのを思い出したのである。あちらこちらの暗がりで笑声が聞えた。

子供は子供の見方をするように人々はまた思い思いの見方をしていであろう。自分はこの映画を見ているうちに、何だか自分のことを諷刺ふうしされるような気がするところがあつた。自分の能力を計らないで六かしい学問に志していっぱしの騎士になつたつもりで武者修行に出かけて、そうしてつまらない問題ととつ組み合つて怪物のつもりでただの羊を仕

とめてみたり、風車に突きかかつて空中に釣り上げられるような目に会ったことはなかつたかどうか、そんなことを考えない訳にはゆかなかつた。

しかしまたこんなことも考えた。この映画に現われて来る登場人物のうちで誰が一番幸福な人間かと思つて見ると、天晴れ衆人の嘲笑と愚弄の的になりながら死ぬまで騎士の夢をすてなかつたドンキホーテと、その夢を信じて案山子の殿様に忠誠を捧げ尽すことの出来たサンチョと、この二人にまさるものはないような気もするのであつた。

燃え尽した書物がフィルム of 逆転によつて焼灰からフェニックスのごとく甦つて来る。巻き縮んだ黒焦の紙が一枚一枚すると伸びて焼けない前のページに変わる。その中からシャリアピンの悲しくも美しいバスのメロデーが溢れ出るのであつた。

歴史に名を止めたような、えらい武人や学者のどれだけのパーセントが一種のドンキホーテでなかつたか。現在眼前に栄えているえらい人達のうちにも、もしかしたら立派なドンキホーテが一人や二人はいるのではないか。そんなことを考えながら帝劇の玄関を下りて、雨のない六月晴の堀端の薫風に吹かれたのであつた。

随筆は誰でも書けるが小説はなかなか誰にでも書けないとある有名な小説家が何かに書いていたが全くその通りだと思う。随筆は何でも本当のことを書けばよいのであるが、小説は嘘を書いてそうしてきても本当らしく読ませなければならぬからである。尤も、本當に本當のことを云うのも実はそう易やさしくはないと思われるが、それでも本當に本當らしい嘘を云うことの六かしさに比べれば何でもないと思われる。實際、嘘を云って、そうして辻つじ褻つまつまの合わなくなることを完全に無くするにはほとんど超人的な智慧の持主であることが必要と思われるからである。

眞実を記述するといつても、とにかく主觀的の眞実を書きさえすれば少なくとも一つの随筆にはなる。客觀的にはどんな間違つたことを書き連ねていても、その人がそういうことを信じているという事實が読者には面白い場合があり得るからである。しかし本来はやはり客觀的の眞実の何かしら多少でも目新しい一つの相を提供しなければ随筆という読物としての存在理由は稀薄になる、そうだとすると随筆なら誰でも書けるとも限らないかもしれない。

前記の小説家もこんなことぐらいはもちろん承知の上でそれとは少し別の意味でそう云

つたには相違ないが、しかし不用意に読み流した読者の中には著者の意味とちがった風に解釈して、それだから概括的に小説は高級なもので随筆は低級なものであるという風に呑み込んでいる人が案外多いということに近頃気がついて、そういう事実に興味を感じている。こんな風に、文字の表面の意味とよほどちがった意味を読者に暗示するような記述法が新聞記事の中などには沢山に見出されるようであるが、これらも巧妙な修辭法の一例と思われる。

とにかく科学者には随筆は書けるが小説は容易に書けそうもない。

昔ある国での話であるが、天文の学生が怠けて星の観測簿を偽造して先生に差出したらたちま忽ち見破られてひどくお眼玉を頂戴した。実際一晩の観測簿を尤もらしく偽造するための労力は十晩百晩の観測の労力よりも大きいものだろうと想像されるのである。

（昭和九年八月『文学』）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第四巻」岩波書店

1997（平成9）年3月5日発行

入力：Nana ohbe

校正：浅原庸子

2005年6月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雑記帳より（2 [#「2」はローマ数字、1-13-22]）

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>